Japan Translation Federation

日本翻訳ジャーナル

社団法人日本翻訳連盟機関誌　2004年11月/12月号

- 目 次 -

Report

特集：第14回翻訳祭

翻訳祭、業界調査、終わる 1

【講演1】日本発・心を癒す贈り物 2

【講演2】「世界同時発スピード経営」... 3

【パネルディスカッション】..... 4

Honrenso

No.94 5

No.95 6

Information

JTF翻訳環境研究会報告 8

JTF西日本セミナー報告 10

法人会員プロフィール 11

JTF<ほんやく検定>合格者発表 .. 12

JTF<ほんやく検定>合格者の声 .. 13

JTFニューフェイス 16

理事会だより 16

社団法人日本翻訳連盟
〒104-0032
東京都中央区八丁堀2-8-1牧野ビル3F
TEL■03-3555-6365
FAX■03-3552-1784
発行人■勝田 美保子（会長）
編集人■野上 員生
印刷■創栄印刷工業株式会社
E-mail■info@jtf.jp
URL ■http://www.jtf.jp/

第14回 翻訳祭　Translation 2004

「日本発世界へ！」～海外への情報伝達が日本経済浮上の鍵～

翻訳祭、業界調査、終わる

JTF常務理事、（株）ベストバージョン代表取締役　野上 員生

「日本初世界へ！」～海外への情報伝達が日本経済浮上の鍵～をテーマに、第14回JTF翻訳祭が10月7日に東京・八丁堀のマツダホールで開催されました。声優やDJとして活躍するかたわら、日本の童謡を英訳してコンサート活動を続けておられるグレッグ・アーウィン氏、およびキヤノン(株)K/Mシステム課長であり東海大学政治経済学部経営学科の非常勤講師も努めらておられる畠中伸敏氏の講演が行われ、続いてソースクライアント、翻訳会社および個人翻訳者を代表する6名のパネリストによるディスカッションが行われました。別の会場に設けられた展示・デモコーナーと書籍・翻訳相談コーナーも盛況で、引き続き行われた交流パーティーも多数の参加者を得て盛り上がりました。

アーウィン氏には、「故郷」、「赤とんぼ」など数曲を聞かせて頂き、非常に好評でした。「日本の童謡には聴いた人を優しい気持ちにさせる不思議な力があり、歌いながら見ていると観客の顔つきが変わってゆく（アーウィン氏）」のを実感しました。講演後の即売会でも多くの方がサイン入りＣＤを買って行かれました。英訳した歌詞はウェブサイトwww.gregirwin.comで見ることができます。

畠中の講演は、キヤノン(株)内における機械翻訳使用の拡大に関するもので、現状では人間による翻訳もまだまだ増加し続ける一方、一定の条件下であれば、機械翻訳が、海外文献などの閲覧のみならず、日本からの情報発信にも大きく寄与できることを明らかにするものでした。

翻訳業界調査

昨年、高崎専務理事を委員長として業界調査委員会が発足しました。その後、約1年の準備期間を経て、本年7月～8月に、翻訳を専業または兼業とする全国の1950社に対してアンケート調査が実施されました。回答率は8.2%（157社）で、第1回目の調査としては予想以上に高く、興味深い結果を得ることができました。今後、本調査に対する業界内の関心度が高まって、さらに有効な結果が得られることが期待されます。

この調査によると、翻訳業界の規模は2000億円／年、1社当たりの年間売上高は1億円未満とのこと。調査の結果は、アンケートに回答していただいた企業には「アンケート調査結果報告書」として送付し、翻訳祭の参加者には「翻訳白書ダイジェスト版」として会場で配布されました。JTF会員の皆さまには、調査結果の要旨と分析結果を日本翻訳ジャーナル2005年1/2月号で報告いたします。アンケートに回答していただいた法人会員の皆さまには、あらためてお礼申し上げます。

翻訳祭

【講演１】 日本発・心を癒す贈り物

― グレッグ・アーウィン ―

日本との最初の出会いは、13 歳のときに学校の図書館で見つけた日本の写真集。庭園や着物の写真にカルチャーショックを受けました。その後、大学時代に人力車のアルバイトで日本人観光客の優しさに感動したこともあり、日本にホームステイ。日本のことをもっと知りたくなり、アメリカに戻って大学で日本語を専攻。そこで、小説や短歌を英訳する授業を通して、初めてまともに日本の文学に触れ、特に、短歌に描かれている気持ちに感動し、それを英語で伝えたいと思うようになりました。また、日本映画の授業で黒澤明の『生きる』を見て、人生観が変わるほどの感銘を受け、再び日本へ行くことを決意。日本に戻り、英語教師として働く傍らDJ・歌手の仕事をしていく中で、知り合った英語教材プロデューサーに依頼され、童謡の英訳を始めました。

日本の童謡には、自然・故郷を愛する心や家族愛のような万国共通の気持ちが含まれており、それはこの世界に対する日本の美しいメッセージだと思いますが、外国ではほとんど知られておらず、日本でもあまり歌われなくなっていることはとても残念です。また、日本の童謡には、聴いた人を優しい気持ちにさせる不思議な力があります。それは、今の時代にとても必要なものではないでしょうか。こういった童謡を英訳し、外国にも日本の心をもっと伝えていきたいと思っています。

童謡を英訳する際、英語の歌としては自然に韻を踏まなければならないため、そのような制約がある中での言葉選びに一番苦労します。他にも、英語の単語が日本語の単語の持つイメージからかけ離れたものであった場合、どのように英語で美しい歌詞にするかということも、かなり苦労する点です。日本語の詩を大切にしつつ、その作詞の心を英語でうまく伝えられるよう、言葉を非常に大事にしながら訳しています。全てが具体的に書いてあるわけではなく抽象的なところが日本の詩の美しさであり、人によって解釈が様々でおもしろいですが、英語のわかる人が童謡を聴いて日本人と同じように感動できるようにするには、大変な苦労が必要です。

自分も翻訳の苦労がよくわかるので、翻訳者の方たちにはぜひ頑張って欲しいと思います。ただ漫然と仕事だからといってやるのではなく、自分自身で達成感を感じられて思い出に残るような翻訳をしていけるといいですね。

翻訳祭

【講演２】「世界同時発スピード経営」

― キャノン(株)　畠中 伸敏 ―

日本のような資源に乏しい国は、製品を次々と出していかなければ地盤沈下は必至です。また、経済の変化の大きな流れに対応できない企業は必然的に脱落するでしょう。このような背景のもと、キヤノンでは課題の一つとして「スピード経営」を掲げ、機械翻訳の導入が大きい成果を上げています。

翻訳ビジネス自体は確実に活性化しています。たとえば、複写機などのマニュアルは、まず日本国内で英語などに翻訳してから、海外の各ブランチに送ってヨーロッパ諸言語に翻訳しており、一方、世界各地から 24 時間アクセスのあるウェブサイトには製品に関する情報を掲載しています。こういった国内からの多言語翻訳による情報発信の拡大を見ると、翻訳をもとにした日本からの情報発信の流れは今後ますます進んでいくものと考えらます。

キヤノンが初めて機械翻訳を導入したのは 1989 年。当初は、操作が面倒なうえに、翻訳結果の精度も非常に悪く、とても使えるものではありませんでした。その後、パソコンやインターネットの普及、インターフェースの大幅な改良、辞書や語法などのデータ拡充により、翻訳の性能自体がかなり向上したため、90 年代後半以降、キヤノン社内における機械翻訳の利用者が大幅に増大。現在では、複写機のサービスマニュアルのような表層的で主観的表現の

翻訳に関わる人のためのメールマガジン
Tra-maga
Translation Mail Magazine
翻訳の専門校フェロー・アカデミーが、月2回配信するメールマガジン「Tra-maga」。翻訳業界で活躍する方々へのインタビューや、フェローの受講生・講師の翻訳作品紹介、プレゼントなど、毎回盛りだくさんの内容でお届けします。
登録はフェロー・アカデミーのホームページから。
登録は無料!　http://www.fellow-academy.com
1975年創立　翻訳の専門校
フェロー・アカデミー
お問い合せはフリーダイヤルかE-mailで
E-mail:info@fellow-academy.com
〒107-8520 東京都港区赤坂 8-5-6 翻訳会館（地下鉄「青山一丁目」駅より徒歩3分）
フリーダイヤル 0120-024240
［受付時間：平日9～21時／土曜9～17時］

ない自然現象的な文章であれば、データ化された過去訳の文体・文法をもとに必要な語彙を絞り込み、さらに言葉の連鎖に関する情報を持った共起辞書を活用することで、なんとか翻訳できるレベルまでに至っています。

この機械翻訳の使用の拡がりは、対象とのインタラクティブなコミュニケーションを通して、多くの人たちが必要な情報を即時的に得られるようになったということであり、非常に大きい成果です。特に、企業の革新の問題とは新しい技術をいかに早く拡散していけるかという命題でもあるため、技術者が海外の文献にアクセスして必要な情報をすぐに得られることは、多大な恩恵をもたらします。この機械翻訳が、日本からの情報発信の大きな一助となっている以上、それをなおざりにしてしまうことは、日本のためにもなりません。もっとも、現状では機械翻訳のシステム自体が翻訳ビジネスにおいて商売として役立つとはちょっと考えにくく、人間が翻訳する量自体も、昔と比べて飛躍的に増えて来ているのも事実です。機械翻訳と人間翻訳との住み分けは今後も可能と考えます。

翻訳祭 【パネルディスカッション】 The Translation Trinity ～翻訳の頂上決戦　本音でトークバトル～

司会：林　秀厳氏 (株)フェロー・ネットワーク代表取締役、JTF 副会長
パネリスト：
石田 育秀氏（株）日本総合研究所研究事業本部 新規事業戦略クラスター長
原田 節雄氏 ソニー(株)スタンダード戦略グループ ダイレクター
阿部 淳一氏 (株)エイブス代表取締役、 JTF 理事
近藤 哲史氏 伝(株)取締役、JTF 理事
井口 耕二氏 実務・技術翻訳者、JTF 理事
森口 理恵氏 医学・薬学翻訳者、JTF 個人会員

「翻訳者」、「翻訳会社」、「ソースクライアント」という三者三様の立場のパネリスト６名が一同に会し、林氏の軽妙洒脱な司会進行のもと、忌憚のない闊達な意見・提言が繰り広げられた。

原田氏は、クライアントと翻訳側の間には埋めようのない考え方のギャップがあると率直に述べた。石田氏は、品質を最重視するうえで必要な納期や価格は惜しまないという姿勢であった。近藤氏は、ここ数年、クライアントから要求される翻訳スピードが対応能力の限界に近づきつつあり、また翻訳者が翻訳にかける時間を単価で決めているような雰囲気があるとした。これを受けて井口氏は、納期を守るためには、仕事依頼の予告などクライアント側の協力も必要であるとした。また、翻訳単価が低下している昨今、品質に頓着せず効率重視で仕事をこなす翻訳者が増えていると述べた。

後半になり、阿部氏から、現在の価格体系では翻訳会社も翻訳者も十分な利益をあげるのは厳しいとしたうえで、JTF による業界全体の改善に向けた働きかけが必要との提言がなされた。森口氏からは、翻訳会社への要望として、翻訳者を育てる意識を持ち、クライアントの要望の伝達やフィードバックを徹底して欲しいとの意見が出された。井口氏も、品質を上げる努力をすれば自然にスピードも上がるのだから、長期的な視点で翻訳者を育てていくべきだと提言した。

クライアントから翻訳会社へ要求としては、単価を引き上げる場合、その根拠をクライアントが納得できるように説明できるかどうか（原田氏）、会社としてのキャパシティや、いざとなったときの対応能力（石田氏）などが挙げられた。

asahi press　SENTENCE

細かな技術的な表現例は通常の書物に記してないことが多いです。
例えば、「前回のセットアップ」の英訳は[a previous setup]、
では、「前々々回のセットアップ時に生成された値」は「？？？」。
並の翻訳者は悩みます。翻訳歴２０年のＪＴＦ会員の吉川潔も困りました。
そういう場合に、お助けマンのｎａｔｉｖｅにＦＡＸで質問し対応しました。
このように実務から得た貴重な文例５００が、朝日出版社から発売中の
センテンス（ＣＤ－ＲＯＭ）の増量例文データとして公開になりました。
詳しくは、http://www.asahipress.com/sentence/ を参照してください。

勝田 美保子 JTF 会長
翻訳業界の認知度を一層高め、日本の産業界の中で確固とした地位を築いていくのが JTF の最も重要な使命です。

橋本 正洋氏
（経済産業省商務情報政策局サービス産業課長）
今後は日本の文化コンテンツを輸出するなど、日本のブランド戦略を進めていくためには翻訳の介在が非常に重要である。

岩田 香氏（日本翻訳者協会理事）
現在のような経済の先行きがわからないような状況では、真のサービスこそが大切だと思い、日夜励んでいる。

パネルディスカッション司会
林 秀厳　JTF 副会長

長田 裕之（翻訳祭企画運営委員長）
おつかれさまでした！

社団法人　日本翻訳連盟会員

ロイヤルリサーチ株式会社

代表取締役　河村 敏

〒173-0012　東京都板橋区大和町 10-11-1003

電話: 03(3964)5141　Fax: 03(3964)5071

E-mail: HDC00641@nifty.com

フリーランス翻訳者随時募集

- 翻訳ツールの使える人
- ホワイトペーパー、インターネット
- 証券、金融、法律、IT技術系

グローバル・コラボレータを
めざして

株式会社アイ・エス・エス　翻訳事業部
〒102-0082
東京都千代田区一番町23-3日本生命一番町ビル4F
TEL:03-3230-2521　FAX:03-3262-6633
http://www.issnet.co.jp

ほんれんそう No.94

翻訳とは何か　翻訳における等価性（6）　高崎 栄一郎

■テキスト・レベルでの等価

前号では、翻訳者は一般にセンテンス（文）のレベルでの等価をはかっていることを、いくつかの実例をもって検証しました。この場合、センテンスを構成する単語、句、節のレベルでは、原文と翻訳文の間に文法構造上の違いがあっても許容されます。このようにセンテンスのレベルを翻訳単位とすることは、効率的でもあります。機械翻訳を利用する場合も、センテンス単位で翻訳が行われて、機械翻訳を使う翻訳者は、原則的にセンテンス単位で翻訳文をチェックしていると考えられます。

しかし、センテンスのレベルを翻訳単位とすると、たとえば長い日本語の文を、１つの英語のセンテンスに翻訳しようとすると、論理的に破綻したり、読みにくい英文になったりすることがあります。また、逆に短い日本語の２つの文を、そのままの構造で英訳すると、幼稚でぶっきらぼうなセンテンスとなることもあります。２つの日本語の文を、1つの英語のセンテンスにすることも許されます。このように、センテンスを超えたレベルでの翻訳が必要になりますが、センテンス以上のレベルを、一般にテキストのレベルと言われています。

言語学で「テキスト」とは、音素、形態素、語、句、節、文に次いで大きな言語単位であり、複数の文から成ります。文と文は内容的に関連しており、一つの流れを形成しています。個々のセンテンスは良く書けているのに、読みにくいという翻訳があります。これは翻訳者が、センテンスばかりに気をとられていて、センテンスからセンテンスへの流れを考えない結果です。

テキストはパラグラフ（段落）、節、章、文書とレベルが高くなりますが、まずはパラグラフのレベルから検討すべきでしょう。そこで、パラグラフの翻訳について議論を進めなければなりませんが、これ以上の議論の展開は中止して、パラグラフの諸問題はテクニカル･ライティングの見地から検討したいと思います。

●最適翻訳とは

「翻訳における等価性」（4）（ほんれんそう No. 91）で引用した Burkhudarov は、適訳、逐語訳、および自由翻訳を、それぞれ以下のように定義しています。

①適訳 (adequate translation) とは、目標言語のルール（語彙、文法、文体）を遵守しながら、原文に含まれている情報をすべて正確かつ完全に伝達するのに必要かつ十分なレベルの翻訳単位での翻訳である。
②逐語訳 (literal translation) とは、目標言語のルールを遵守しながら、原文に含まれている情報を伝達するのに必要なレベル以下の翻訳単位での翻訳である。
③自由翻訳 (free translation) とは、目標言語のルールを遵守しながら、原文に含まれている情報を伝達するのに必要なレベル以上の翻訳単位での翻訳である。

パラグラフ・レベル、テキスト・レベルの等価性を強調した他の文献を紹介しましょう。

『すぐれた翻訳は、語対語の等価性を追うものではなく、文対文、ときにはパラグラフ対パラグラフ、そして究極的にはテキスト対テキストの等価性を追求するものでなければならない。』[5]

●翻訳者はだれの顔を見ているか？

「等価性」の議論を終わるに当たって、私が日ごろから悩んでいる問題を考えていただきたいと思います。それは、翻訳者が翻訳作業を行う際に、だれを意識しているのか、またはだれを意識しなければならないかという疑問です。具体的に言うと、私たちは次の中のだれを意識しているのでしょうか？

（a）原稿を書いた人
（b）翻訳を発注したクライアントの窓口担当者
（c）翻訳会社経由で受注した場合、翻訳会社
（d）翻訳文を読むと思われる読者

（a）は、原文をできるだけ正確に翻訳しようという立場であり、semantics（意味論）重視の視点であるといえます。意味論には語彙を扱う立場と、文の意味を扱う立場があります。(d) は communicative approach（伝達的）であって、内容の伝達を最優先としています。Communicative な翻訳では、翻訳者は目標言語の読者を意識しています。Communicative な翻訳者は、必要だと考えれば、異国的要素を目標言語の文化に移し替えることも辞さないのです。

ここまで考えてきた等価翻訳の議論は、これらの問題にかかわっています。ところで（b）と（c）は営業的な視点です。実務翻訳は職人的な仕事ではあるけれど、経済的な活動、すなわちビジネスだから、このような視点も必要でしょう。

「翻訳とは何か　翻訳における等価性」と題する記事を６回に分けて連載しましたが、ほとんど反響がなかったので、関心を持っている方が少なかったのではないかと反省しています。そこで次号から、そこで「翻訳とは何か　翻訳における等価性」のシリーズを終わって、テクニカル･ライティングのシリーズを始めさせていただきます。

[5] 安藤貞雄『英語の論理・日本語の論理』大修館 1986

（高崎 栄一郎：日本大学非常勤講師、JTF 専務理事）

ほんれんそう No.95

私の翻訳体験から（3）：文法について　松下 巌

今回は文法について従来と異なる観点から書かれた本を紹介します。ただ、私個人の興味をひいたところを中心に説明していることをお断りしておきます。本論に入る前に、文法についての私の体験、あるいは関わり方を述べておきます。

翻訳と文法

翻訳しながら英文法の本を見ることはあまり多くありません。いつもは英語の辞書で文型の説明や文例を調べるだけです。具体的には、動詞の目的語として動作がくるとき、動詞によって原形、to-不定詞、動名詞のどれが使われるか、あるいは前置詞がどのように使われるかを確認します。

一方、日本文法についてはどうでしょうか。翻訳するときに日本文法の本を見ることはほとんどありません。英文法と違って、文章の解釈や作成に利用できる文法書として手頃なものを持っていないということもあります。国語辞書は、簡単な文例は載せていますが、文法の説明はほとんどないので、難しい語句や漢字を調べるのに使用するだけです。

文法は、文を書くための規則ではなく、実際の文がどういう構成になっているかを整理したものですから、人によって考え方が違うのは当然です。ここで紹介する本は、英文法および日本文法について新しい考え方を教えてくれます。

『英文法をこわす』

このショッキングなタイトルは、大西泰斗氏がNHKブックスの１冊（番号958、2003年1月30日）として書いた本の表題です。副題に「感覚による再構築」とあります。

文法は数多くの規則や用法を覚える必要があるので面倒だと思うのが普通ですが、大西氏はネイティブの語感をじかに捉えることで、規則や用法を丸暗記する必要はないと言っています。

たとえば、指示代名詞のthatと接続詞のthatはともに、聞き手の注意・関心を導くという「イメージ」を持ち、このイメージを身につければ、thatの数多くの用法がわかると述べています。

動詞を名詞化する動名詞とto-不定詞についても、動名詞が-ingの持つ躍動感、生き生き感に対してto-不定詞は一般論を述べているに過ぎないので、hopeやwantには動名詞は使えず、to-不定詞が使われるのがわかると説明しています。

theは「一つに決まる」ときに使われるとしているが、theのイメージには「誰もがそれとわかる」「際立っている」という語感が付随すると説き、新聞にはtheが使われるのが多いのに雑誌には少ないのはこの語感のためであると説明しています。さらに範囲を広げて、the、a、無冠詞、some、anyのイメージ、およびお互いが持つ境界線についても簡単に述べています。

大西氏は、英語の文型、動詞の時制と形をはじめとして、前置詞、動詞にはそれぞれのイメージがあると具体例を挙げて説き、訳語では理解できない英文の意味の違いを説明しています。たとえば、使役を表すhave、get、make、letのイメージを説明した後に

I had my kid brother help me.
I made my kid brother help me.

という２文を示して、haveの持つ「あたかも当然のように」、makeのもつ「有無を言わさずに」という雰囲気がわかるに違いないと解説しています。これらの動詞のイメージがつかめていれば、「使役動詞」という文法事項は不要だと主張しています。

このイメージに基づく英語の理解についてもっと詳しく知りたいという人のために、大西氏は、ポール・マクベイ氏と共著で何冊も本を出しています（奥付の著者紹介参照）。

TRADOS
THE LANGUAGE ARCHITECTS
年末キャンペーン実施中
お問い合わせは info-jp@trados.com まで
トラドス・ジャパン株式会社
〒107-0052 東京都港区赤坂5-5-13 電話:03-3568-7072 FAX:03-3568-7073

『日本語に主語はいらない』

これも常識とは異なるタイトルですが、金谷武洋氏が講談社選書メチエの１冊（230番、2002年1月10日）として書いた本の表題です。副題に「百年の誤謬を正す」とあります。この副題は、明治維新の時代に、英文法に準拠して日本文法を創定したことを誤りとして、それを正す必要があるということを主張しています。

日本語に主語はないと初めて主張したのは、三上章氏で、『現代語法序説』（刀江書院、1953年6月20日）および『象は鼻が長い』（くろしお出版、1960年10月30日）で、主語廃止論、日本語の基本文は動詞文と名詞文であること、助詞「は」の本務（題述とピリオド越え・コンマ越え）と兼務について述べています。

金谷氏は、三上氏の議論をさらに発展させて、主語だけでなく人称代名詞もいらないこと、日本語の基本文は

名詞文（例：赤ん坊だ）
形容詞文（例：愛らしい）
動詞文（例：泣いた）

の三つであること、自動詞と他動詞の考え方が英語とは違うことを説いています。

金谷氏は、モントリオール大学の日本語クラスにおける日本語教師の経験から、学生が呼びかけるときに使う「あなたは…」という変な日本語を正すには、『「主語」を日本文法から消すしかない』と述べ、「主語」がなくなれば、「人称代名詞」も存在理由がなくなると説明しています。

正しい日本語にするには「人称代名詞」を使わないというのは、英文を和訳するときによく言われる「代名詞をカットすべし」（たとえば、安西徹雄著『英文翻訳術』（ちくま学芸文庫）の第Ⅴ章「代名詞は切れ」参照）というのと同じことだと思います。

ピリオド越え・コンマ越えは、『吾輩は猫である』の冒頭

吾輩は猫である。名前はまだ無い。
どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニヤーニヤー泣いて居た事丈は記憶して居る。

において、「吾輩は」が三つの句点（。）を越えて、次々の文まで及んでいることで説明されます。文の構成要素でありながら、文の外に立って次々とほか文に係るこの助詞を金谷氏は「スーパー助詞」という言葉で表現しています。

このスーパー助詞は、主文と従属文の主語が同じ場合（一方は代名詞）やパラグラフ内で同じ名詞を繰り返し使って一貫性を保つという修辞法の場合の訳に使うと文章が簡潔になると思います。

金谷氏は、英語と日本語の文構成の違いをクリスマスツリー型（英文は主語と動詞で始まり、その下（後）に目的語や補語、修飾語がくるので頭が尖り下が広がった形で表される）と盆栽型（日本文は最後に述語があり、その上（前）に「が格補語」や「を格補語」、「で格補語」が同じレベルで並列で係るため、枝が低く広がった盆栽で表される）で説明しています。私は、この盆栽型は、日本語で語順が自由であることも表していると思います。

金谷氏は次の２冊で三上章氏の主語廃止論の擁護をさらに展開するとともに、新しい日本文法の提唱、さらに比較文法論まで筆を進めています。

日本語文法の謎を解く――「ある」日本語と「する」英語
ちくま新書 383（2003年1月20日）

英語にも主語はなかった――日本語文法から言語千年史へ
講談社選書メチエ 288（2004年1月10日）

この2冊にも、翻訳者として参考になる英語と日本語の相違点がいくつも述べられています。個人的なことですが、長い間、オペラの対訳のイタリア語で「主語」の代名詞が省略されているのを見て何故だろうと思っていたのが、『英語にも主語はなかった』を読んで納得しました。

英文法と日本文法の新しい考えの本を紹介しました。ほとんど例を入れなかったため、わかり難いところがあったと思いますが、実際には豊富な例でわかり易く説明してあります。私のつたない紹介よりはよくわかるので、書店で手にとってご覧になるようお勧めします。

特許翻訳者の会 Patent Translators Association ; P.T.A.
会員募集中
＜特許翻訳者の会とは＞
特許翻訳者の会は、特許翻訳に何らかの形で関わっていらっしゃる方々のための全国的なサークルです（1996年11月発足）
全国の特許翻訳者の方、これから特許翻訳を学びたいとお考えの方、ならびに翻訳を発注するお立場の企業や特許事務所の方が対象です
＜会員特典＞
・特許翻訳に役立つオンライン辞書（機械・電気・化学・バイオ等の専門用語や特許専門用語を収録） *2004年11月上旬開設予定
・特許翻訳に関する有用な情報（毎月数コラムが更新）
・当社主催セミナーの参加費が10%引きになるほか、関連団体の主催するイベントやセミナー等への参加費の割引
・特許翻訳等に有用な書籍の紹介や割引購入
・会員個人の同意を得た上で翻訳発注者に紹介する場合があります
（紹介料などは一切いただきません）
Chizai Academy
● お申込み・お問い合わせ・詳細は
株式会社知財翻訳研究所
www.chizai.co.jp

JTF 翻訳環境研究会報告

****
平成 16 年度第 3 回 JTF 翻訳環境研究会
平成 16 年 8 月 10 日（火）14:00 ～ 16:40
【開催場所】翻訳会館
【テーマ】品質改善:新トライアルでミスマッチ解消
【講師】近藤 哲史氏（伝株式会社）1620
****

●トライアル課題の仕様の遵守

翻訳者にとって見落としがちなトライアル合格要素が、トライアルの仕様どおりに作成されているかである。具体的には、ファイル形式や文体(です・ます調など)だけでなく、誤字・脱字、漢数字を避けるといった数字表記、また漢字・かな書きの区別などが挙げられる。これらは技術文書の工程として翻訳がその後「加工される」点を考慮し、翻訳後の手作業をできるだけ少なくするための配慮といってもよいものである。翻訳文自体には影響は少ないように見えるが、近藤氏によればこの仕様の段階で大きなマイナス点になってしまうものが比較的多いので、細心の注意を払わなければいけないという。

●技術文書としての正確な訳出

今回のトライアル課題「家庭用ジューサーの取扱説明書」のような技術文書としての翻訳には、正確な訳出が不可欠である。例えば、数値や単位を正確に換算するだけでなく、量が増える／減るや動作の方向(上下左右)など、原文に書かれている事実と異なる訳文さらには訳抜けをしては大幅な減点になってしまう。原文の内容を「事実として捉え」忠実に訳文に反映させることが、技術文書の特質ゆえ重要な点である。

●課題文の内容理解

近藤氏はさらなる採点基準として課題文の内容を理解しているかという点を挙げた。内容理解は単なる英文解釈とは異なり、原文の微妙な言い回しや踏み込んだ表現を的確に捉えることである、という。これにより、原文の表現を訳文として論理のなめらかな展開に再構成する、また原文中の事実を読み手にとって自然な表現で言い表すことにつながる。これは先の「正確な訳出」は内容理解なしには行うことはできないし、また内容理解があってこそ次のポイントである「自然な表現」ができる。

●日本語としての自然な表現

技術文書の翻訳と言えども成果物は「日本語の文書」として読まれることには変わりなく、このためには日本語としての自然な表現が重要となってくる。読み手にとって自然な流れを作り出すには、翻訳が「文章としてのリズムを持つ」ことが大切である。具体的には、できるだけ接続詞を加えないことや、くどい丁寧表現などは避けるなどのテクニックを同氏は挙げている。

この流れに、技術文書として先に挙げた「論理のなめらかな展開」を加えることも忘れてはならない。答案の中で多く見受けられたのが、一文一文を訳した上で、その前後の文と比較しつなげてはさらに短くまとめてしまい、原文の全体像が変わってしまう例である。これらは原文の情報の流れを変えたり無理に止めることにもなりかねない。ただし日本語の自然な流ればかりに集中しすぎて内容理解を誤って訳出してしまうこともある。技術文書を手にする読者のことを考えれば、こうした「論理の展開と自然な日本語」のバランスをとることが大切である。

●トライアルで求められているものを意識する

これまで挙げてきた採点ポイントはすべて相互に密接に関わっている。こうした採点基準に表れているのは、近藤氏が求める翻訳者とは、「上手な翻訳」ができる人ではなく「良い日本語版」を作れる人である。これはすべてトライアルの意義を明確に表している。同氏によれば、トライアルは原文である取扱説明書からの抜粋を訳すものでなく、訳文となる取扱説明書を想定しその中からの「抜粋」と考えなければならない。それは技術文書にあるドキュメントの世界を的確につかみ、つかんだ世界を自ら語りかけることである。トライアル合格を目指すには、ビジネス・マナーを守る以外にも、翻訳が使われる状況を念頭に置きながら、正確な訳出、内容理解、そして原文を自然な日本語として仕上げることが必要なのである。

報告者：玉置 祐子　個人翻訳者、日本通訳学会・翻訳理論研究会所属

****
平成 16 年度第 4 回 JTF 翻訳環境研究会
平成 16 年 9 月 14 日（火）14:00 ～ 16:40
【開催場所】翻訳会館
【テーマ】技術翻訳：専門家が求める技術翻訳の特徴
【講師】土井 憲一氏（日英独仏技術翻訳・通訳者、航空機・建設機械等 製造業）
平井 通宏氏（技術士（情報工学）、大学特任教授（科学技術英語））
【司会】坂元 誠氏（技術翻訳者、機能性工業材料応用各分野、JTF翻訳環境研究会企画運営委員）
****

●技術翻訳の動向および日英語技術文

技術翻訳および国際交流経験も豊かな坂元氏は、まず工業技術翻訳の現状について翻訳需要事情の二極化などの特徴を挙げた。英日翻訳需要は料金相場が底打ちしながらも高品

今日も、人が、財産。
良い仕事は、良い人材を育てます。翻訳、通訳、ITの人材サービスで豊富な実績を誇る十印ヒューマンフロンティアは、そう考えます。あなたの才能がイキイキと輝ける機会を提供することが、わたしたちの使命であり、ビジネス力であると考えます。派遣という事業の主役は「人」です。主役であるあなたの希望・実力・適性を的確に把握し、あなたにとって理想的な職場を紹介する。必要であれば、スキルアップのための支援も積極的に行います。十印ヒューマンフロンティアで、ワンランク上の仕事を選んでください。
あなたの仕事は、ここにあります。
派遣スタッフ募集
■翻訳者 ■通訳
■テクニカルライタ
■プロジェクトマネージャ
■バイリンガルセクレタリ
登録スタッフを随時募集中
www.toin-hf.com
一般労働者派遣業(般13-040647)／有料職業紹介業(13-04-ユ-0518)
Phone 03-3455-8861　Fax 03-3455-8863　e-mail info-global@toin-hf.com
株式会社 十印ヒューマンフロンティア
〒105-0014 東京都港区芝1-12-8 第2十印ビル
TOIN HumanFrontier

質翻訳の料金は不変となっており、日英翻訳は外注内容の多様化と企業内英語文書の増大が同時に起こっていることを指摘した。

また日本語技術文には、冗長語句・反復記述の多用や謙譲語句の偏好などの特異性があり、日本人技術者特有の省略語法および造語についても正しい理解が必要である。日英翻訳においては正確性と論理性を重要ポイントとして、技術英語で慎重に使い分けるべき英単語、英語では使用できない日本語の表記法などにも細心の注意を払わなければならない。坂元氏によれば、英日・日英に共通して、翻訳者には「顧客・最終読者志向」の執筆姿勢が必要である。

●翻訳者、翻訳会社、ソースクライアントの関係

平井氏は、実際に納品された訳文を取り上げ、訳文にあった問題点は字面だけの理解で訴える力に欠けた表層翻訳であることが多い事実を指摘した。改善例には、技術的に見て適切な専門用語を選択するだけでなく、日本語原文の真意を取り出し日本語表現の不足を補う深層翻訳が役に立つ。この具体例を通して、翻訳には、異言語間コミュニケーションとしての構造的問題や、原文至上主義（和文英訳）VS コミュニケーション至上主義（英作文）という難しさがあることが明らかになった。

また翻訳者だけでなく、翻訳会社も品質対コストという悩ましい課題を適切に処理していなかったり翻訳者を育成する姿勢に欠けていたりといった問題が多々見られる。また最終顧客側にもドキュメントの品質に対する考え方や翻訳者/翻訳会社育成の姿勢に問題がみられることが多い、と指摘している。理想的には、顧客―翻訳会社―翻訳者のより緊密なコミュニケーションが今後重要になることを平井氏は強調した。

平井 通宏氏

土井 憲一氏

●テキスト上に見られる技術翻訳の問題点

土井氏は、技術翻訳で成功する鍵として専門分野の知識だけでなく「原文理解」および「自然な訳文生成」が最も重要であるとした。英日翻訳には、英語を母国語とする人とほぼ同じ感覚で内容を理解する必要があり、特に簡単な単語を組み合わせた英文の場合、重大な誤訳を生み出す可能性がある。翻訳者は、土井氏の挙げた20以上の英文の実例および誤訳・試訳を通して、見落としがちなポイントを確認できた。

日英翻訳には、原文である日本語の文面だけでは著者の意図を理解できないことが多いため、英訳に際しては著者の意図を「行間」から推察した上で英文で表現しなければならない。具体的には、単位、記号、日付など表記の違いから、カタカナ表記の専門用語と実際の英単語の違いを捉え、土井氏が実践するように「訳注」（クライアント（含翻訳会社）の指摘に対する事前回答）という形で提示することも必要である。英日・日英翻訳のこうした目的を達成するには、言語の本質が音声にあるという認識に立ち、英語を話す能力を発音、イントネーション、語法で身につける必要がある、と土井氏は指摘した。

翻訳者におさまらず、技術者、英語ユーザーとして幅広い経験を持つ 3 氏の講義の共通点は、技術文書の翻訳といえども専門知識におさまらず正確に原文を理解し的確な訳文を生成することである。30年以上にわたり実践してきた各氏は、日英翻訳を「翻訳を越えた“ 代行著述 ‟ 英作文 ‟ 英文表現 ”」と呼んでいる。こうしたスキルが、今後目まぐるしく変化する翻訳市場で生き抜くためには必要になってくるだろう。

報告者：玉置 祐子　個人翻訳者、日本通訳学会・翻訳理論研究会所属

明日も、人が、財産。

十印の中心事業は、海外のソフトウェアを「ローカライズ」すること。各国のソフトウェアを、文化の異なる日本という地域環境へ最適化するために必要な仕事は、多種多様を極めます。
そのため、ひとつのプロジェクトを完成させるために必要な才能もまた、多種多様なのです。深度の深い専門知識から、俯瞰的視野でプロジェクトをコントロールできる能力、そしてアイディア鋭いデザイン能力。十印の仕事が必要としている才能は膨大です。

仕事は、あなたを必要としています。

募集 □翻訳者（在宅） □翻訳QA □ローカライズエンジニア
□テスター（エンジニアリング） □プロジェクトマネージャ

応募方法 十印のwebページにアクセス後、応募フォームに記入してください。
志望職種等を明記してデータを送信ください。 www.to-in.co.jp
弊社担当者よりご連絡いたします。※翻訳者および翻訳QA志望者には、トライアル受験が必須。

Phone 03-3455-8715　e-mail hrs@to-in.co.jp

株式会社 十印［ベンダーリレーションズ］
〒105-0014 東京都港区芝1-12-8 十印ビル
TOIN

JTF 西日本セミナー報告

****
平成16年8月28日（土）14:00～17:20
【開催場所】グランキューブ大阪（大阪国際会議場）1004会議室
【演題】「公開トライアル！」翻訳会社のトライアル担当が熱く語る！これが合格のポイントだ！
【講師】 近藤 哲史氏（伝株式会社取締役、JTF理事）
****

今回のセミナーは、㈱アメリア・ネットワーク様の「トライアル現場主義！ライブ版」というサブタイトルもあり、色々ご協力を頂戴しました。最初に深く謝意を表したいと思います。

今回はいつもと、何もかもが最初から異なっていました。

＜反響＞

まずはその反響の凄さ。予想を遥かに越えた数の方々の参加申込があり、初めて開催場所を変更しました。変更連絡でご迷惑をおかけしましたが、おかげさまで52名もの多くの方とご一緒することができました。

＜課題文提出＞

今回、参加者には事前課題文を指示通りに和訳していただき、あるルールに沿って提出を頂きました。講師は会場でそれらにコメントを付しながら添削していき、翻訳会社が求める翻訳の形とはなにか？またトライアル担当者はどのように判断しながらそれを行っているかを探っていくというものでした。

近藤　哲史氏

多くの方々はルールに従ってお送りいただいたのですが、中には、「？？」という方もおられて、「指示された形式に従って提出する」という、既にプロの翻訳者には当然のことが「この程度は自己裁量の範囲だろう」とお考えになったのか、案外無視されていたことに驚きを感じました。

提出の答案メールをそのまま近藤氏に転送したのですが、「良かったです・・。まだ答案が＜手書き＞や＜手旗信号＞や＜留守番電話への吹き込み＞でなくて」とクールな冗談を言っておられました。今まで、本当に多くの方の様々な答案と「格闘」されてこられたのだなと思いました。

私見ですが、せめて＜テキスト形式での保存＞はどういうものかは押さえておく必要があると思います。

＜汗！＞

参加人数は52名、課題提出は33名。その答案を事前にOHPに作成されて、一枚づつに「朱」で添削されていかれました。その場でサラサラと添削している雰囲気を出されていましたが、実は事前に丁寧に添削され、それを控えにお持ちになっていました。また、OHPは近くにいると非常に熱く、また近藤氏は3時間立ちっぱなしで、その額にはずっとうっすら汗が滲んでいました。いや、本当に氏の熱意には頭が下がりました。

＜挙手多数で時間延長＞

33通りの答案に総合判定としてC（大半）や、B（少数）や、A（たった一人）と判定を下していかれましたが、確かに答案を並べ比べてみると、本当にこれが同じ英文（内容は「ジューサーのお手入れマニュアル」）からの翻訳かと思うほどバラエティに富んでいました。また実際のコメントでは、基本的な漢字の使用方法のミスから、参考資料が提示されているたにもかかわらず未確認のため生じている取り違い、意訳のしすぎ等も的確に指摘されていました。

「明らかにバックグランドがある方のお上手な翻訳ですね」というコメントならまだしも、「口語体と文語体が混じる読み難いまとまりない文章ですね」とか、「明らかに大きく取り違えて解釈していますね」等は、回答された方にとっては本当に聞いているだけで試練だったのではないかと思いましたが、後ほどアンケートで確認させて頂きましたところ、殆どの方が「満足した」というお答。中には不合格通知がくるだけでフィードバックが何もない翻訳会社のトライアル受付に不満を持たれていた参加者もおられました。

氏の真摯な講義に感銘を受けられた方も多く、終了予定時間が過ぎても、質問の挙手が止まず、熱心にお答えいただいている姿に、また次々と質問が寄せられました。次の予定が入っていなかったこともあって、少し時間延長して対応させていただきました。これも今回初めての出来事でした。

＜本当に西日本＞

いつもセミナーには各地からご参加いただくのですが、今回は佐賀、富山、長野、岡山、山口、徳島、愛知等の遠方からお見えになる方が目立ちました。どこからお越しになろうともですが、より一層有意義なセミナーに、と事務局一同、気を引き締めておりました。これからも参加各位のご期待に応えられるセミナー開催に努めたいと思います。

西日本在住、ご出身の方々、及び企業各位のこれまで以上のご協力を何卒宜しくお願い致します。

＜コラボレーション＞

冒頭でもご紹介しましたが、このたびはアメリア・ネットワーク様とのコラボレーションとなりました。セミナー当日は東京から長田裕之チーフにお越しいただき、いろいろとお手伝いをいただきました。最後になりましたが、大変ありがとうございました。

写真左：アメリアの長田チーフ
右：西日本委員会　委員長　東　郁男

報告者：　近藤 美樹
（株）翻訳センター企画室長

High quality　New standards in translation　Prompt service
取扱言語　英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・中国語・韓国語　等（その他言語にも対応しております）
取扱分野　特許・工業・医薬・金融
取扱内容　翻訳・メディカルライティング・ネイティブチェック・通訳・印刷・テープ起こし　等
HONYAKU CENTER
New Standards in Translation
since1986
株式会社翻訳センター
大阪営業部　〒541-0046 大阪市中央区平野町2-5-8 平野町センチュリービル9F　tel:06-6202-3287　fax:06-6204-0608　osaka-g@honyakuctr.co.jp
東京営業部　〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-8-10 虎ノ門15森ビル3F　tel:03-3502-1921　fax:03-3502-3521　tra-g@honyakuctr.co.jp
日本橋営業部　〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3-2-13 アドバンテック日本橋ビル1F　tel:03-3242-3831　fax:03-3242-3835　nbo@honyakuctr.co.jp
名古屋営業部　〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-12-12 竹生ビル2F　tel:052-571-2101　fax:052-571-2103　nagoya@honyakuctr.co.jp
翻訳者を募集しております。　www.honyakuctr.com　詳しくはウェブサイトをご覧下さい。

法人会員プロフィール

株式会社 TEN（テン）

〒541-0053
大阪市中央区本町1-7-6
本町センチュリービル 2F
TEL : 06-6262-6042
FAX : 06-6262-6014
E-mail : tencoltd2@dream.com
URL: http://www.ten-company.com

●満12歳になりました

株式会社TENは1992年に英会話・スペイン語・中国語などを教える外国語学校TENランゲージ＆コミュニケーションを開校し、ビジネスの世界に産声をあげました。その後1997年に翻訳事業部を、翌年には通訳事業部を立ち上げ、以来、外国語に関するさまざまなお仕事を展開させていただいております。おかげさまで、今年の3月3日に満12歳のお誕生日を元気に迎えさせていただきました。これもTENを応援してくださる皆々様のおかげと深く感謝しております。現在TENランゲージ＆コミュニケーションでは、通訳者や翻訳家を目指す方々のためのプロフェッショナル・コースを中心に多くのクラスがあり、プロを目指す受講生たちが日夜を問わず、熱心に学んでいます。ひたすら努力を重ねる受講生たちが、近い将来において、翻訳や通訳者としてデビューするのを講師や教務スタッフも楽しみにしております。

●言葉は　生きている

言葉は　音になり　文字になり
人のあいだを行き交います
きもちを伝え　心をむすび
ときには世界の流れをも変えます
そんな言葉の素晴らしい力を
もっと大きく育んでいきたい
コミュニケーションのもつ可能性を
もっと深く広く追求していきたい
わたしたちを動かすのは
いのちある言葉への熱い想い
言葉が動かすのは　人それぞれの未来
生きて届く　心に響く
そして何かがはじまる
それが　わたしたちTENの言葉です

上記のコピーはTENが誕生したときに作られたメッセージ・コピーです。ここにTENの言葉への熱い想いが込められています。

“いのちある言葉”これがTENの企業テーマです。言葉から言葉へただ置き換えること、お客様のご要望をただお受けすることがTENの役割ではありません。ビジネス全般から電子機器、機械、会社案内や製品カタログ、広告、医学にいたるまで、あらゆる分野の専門知識と情勢の深い理解とつねに先を見つめるしなやかな視点からご要望に沿ったアドバイスと提案を展開し、言葉の奥にある真意をより効果的に伝えることが私達の基本です。

●ありがとうございます

TENには営業を主業務とする社員はおりません。TENのスタッフは翻訳コーディネイトを核の業務とし、お客様の開拓はその後に続く業務としています。TENが誇れるもの。それはTENを大切に思ってくださるお客様方の存在です。TENの新しいお客様はその70%がお取引きをいただいているお客様からのご紹介です。おかげさまで、小さな体ながら、多くの優良大手企業さまともお取引をいただけるまでになり、TENの翻訳・通訳部は大きく業績を伸ばしております。

●TENがお客様に愛されるわけ

TENの毎日のミーティングでは社員一同が4つの確認作業をします。端的に言えば、自分たちがお客様のプラスになっているか、という確認です。いずれの翻訳会社さまでも、顧客のニーズを満たすべく、高い品質と納得のいく料金体制、そして仕事を完成させ、納品するまでの速度に重きをおいておられると思います。TENは必要不可欠な3点にきめ細やかな配慮を乗せて、お客様にお仕事をお納めしています。TENではいただいた原稿に少しでも納得のいかないところがあれば、質問を繰り返し、より読み手の心に響くように、ご提案をいたします。そして徹底したアフターケアを心がけ、クライアントさまのお役に立てるように努めております。

●レイアウト・制作・印刷

TENでは翻訳業務だけに留まらず、DTPサービスも行なっています。各国語アウトラインデータの作成、訳文のレイアウトデータへの流し込み作業、写植校正から印刷までを一括で担うことにより、お客様の時間と費用の削減化のお役に立っています。

●TEN事業内容

○翻訳・校正業務（英語・中国語・韓国語・フランス語・イタリア語　その他）
○各種コピーライティング
○テープ起こし
○広告企画・制作・印刷
○通訳・語学スタッフ・バイリンガルMC派遣
○外国語ナレーション
○国際シンポジウム・学会などの企画運営

●翻訳・校正分野

コンピュータ・半導体・ソフトウエア・通信・IT関連・広告・機械・産業技術・科学技術・金融・経済・医学・製薬・保険・繊維・金属・鉄鋼・食品・電機・化粧品・建築資材・スポーツ・音楽・出版・その他全般
△会社案内／商品案内・仕様書・取扱説明書
△SPビデオ・ナレーション原稿
△学術論文
△商品広告／コピーライティング
△財務報告書・環境報告書
△企画書／契約書／団体会報
△海外ツアー案内／保険説明書・申込書
△映像　その他全般

●今夏より日本翻訳連盟様のお仲間に入れていただきました。今後とも日々努力を欠かさず、努めてまいりたいと思います。業界の皆様方のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

TEN COMPANY LIMITED

翻訳者・チェッカー登録募集

●翻　訳　●翻訳チェッカー　●DTPオペレーター

語　　学：英語/フランス語/ドイツ語/イタリア語/スペイン語/中国語（簡体/繁体字）/韓国語　他
分　　野：金融経済・経営・機械技術・コンピュータ・医学・薬学　など全般
応募方法：履歴書・職務経歴書をe-mailまたは郵送してください。PC環境も記載してください。

株式会社 TEN　〒541-0053　大阪市中央区本町1-7-6 本町センチュリービル2F
Tel 06-6262-6042　Fax 06-6262-6014　e-mail tencoltd2@dream.com